

「ハッカソン」スタイルでセミナー

タイで開催 ビジネスモデルの創出目標に

IT（情報技術）のエンジニアらが短期間に集中してサービスやソフトウェアの開発し、その成果を競い合う「ハッカソン」のスタイルを取り入れた環境セミナーが今年2月、バンコクのチュラロンコン大学で開かれた。タイトルは「ビヨンド・バイオダイバーシティSDGsハッカソン」。学生たちの柔軟な発想をもとに、環境問題を解決する社会的なビジネスにつなげることが目的だ。

「ハッカソン」は、「高い技術でシステムを操る」という意味のハック（hack）とマラソン（marathon）を組み合わせた造語だ。もとは、ITのエンジニアやデザイナーらが、限られた時間でソフトウェアなどを開発し、その成果を競い合うイベントで、米国で1990年代末ごろに始ま



バンコク南部の沿岸沿いにたまったプラスチックや缶などのごみ

ったと伝えられる。日本では2011年、東日本大震災の復興支援のためにIT関係者らがハッカソンを実施したのを機に広がったといわれ、現在では企業の新規事業、商品開発に活用しているほか、大学と企業が産学連携のハッカソンイベントを開催

している。そのハッカソンをヒントにしたのが、今回の「ビヨンド・バイオダイバーシティ（BB）」セミナーだ。イオン環境財団、早稲田大学、チュラロンコン大学などの共催で、同大の学生ら50人が参加した。

海洋プラスチックをテーマに

手順としては、学生たちが10チームに分かれ、メンターと呼ばれるサポート役として教員らが各チームに付く。学生たちは、環境破壊の現状を学んだうえで、国連の持続可能な開発目標（SDGs）の達成に寄与するビジネスモデルを考える。具体的には、タイをはじめ東南アジアで深刻化する海洋プラスチック汚染の解決をテーマに掲げた。

プログラムは、フィールドワークから始まった。バンコク南方の

海岸沿いを訪れ、プラスチックなどのごみが堆積する現状を目の当たりにした。陸上でポイ捨てされ、風に吹き飛ばされて海に流れ込んだプラスチックごみが、劣化し、砕けて微細なマイクロプラスチックとなつて生き物たちを苦しめている。

地元の「バンプー・レクリエーション・センター」のスタッフで、オーストラリア出身の環境活動家、ロバート・カニンガムさんは「プラスチック汚染だけでなく、日本の原発事故による放射性物質の流出のように目に見えない汚染もある」と話す。沿岸の沼地では、日本企業などの助成でマンダローブの苗の植林が進められていた。

続く講義で、アジア工科大学院教授の佐々木ノビアさんは、人工知能（AI）を活用した環境管理について解説した。「AIなら気

自分たちで考えたビジネスモデルを発表するチュラロンコン大学の学生ら。タイ・バンコクで2月4日



学生たちの討論の内容に耳を傾ける吉川成美さん（左）2月3日



象や地表などの大量のデータを集めて分析できるので、森林劣化など地球の状態が分かり、植林活動などに生かすことができる」と言い、「若者たちは、コンピューターでゲームをするだけでなく、得られた情報を自分のものにして行動してほしい」と呼び掛けた。

イトだ。学生たちは解決に向けてのアイデアを出し合いながら、各自のパソコンで必要な事柄を調べ、ビジネスモデルを組み立てていく。グループミーティングは夜まで続き、翌日のプレゼンテーションに臨んだ。

の処理やリサイクルのプロセスが分かるアプリケーションを提案したチーム。そのほか、買物の会計の際にプラスチック商品の購入量が分かるアプリ、海洋ごみのリサイクルグラスからつくるアクセサリなどの商品プランがあった。

学部のパナット・プリアンパンさん（21）は、「ビジネスにするという目標があったのでチームでの話し合いに具体性があった。どんな企業も環境に負荷をかけないことが当たり前前の社会にしていきたい」と声を弾ませた。

BBセミナーは、イオン環境財団が主催する「アジア学生交流環境フォーラム」（12年から実施）の関連事業で16年から始まった。セミナー開催校は、東南アジアの大学が中心で、国境を越えてアジアの「環境人材」を育成することが一つの目的となっている。

「SDGsハッカソン」を企画した県立広島大学大学院教授で早稲田大学HNRM研究所客員教授の吉川成美さん（50）は、「タイでは、環境への意識が高い『グリーンコンシューマー』が増えていくと聞く。今回はそれらの人々だけでなく、起業する側も魅力を感じる実現可能なプランや消費のあり方を変える斬新なアイデアが次々に生まれた」と評する。気候変動の要因となる二酸化炭素やごみの削減など課題は山積している。「多様な価値を取り入れ、イノベーションを加速することが大事だ」と吉川さんは説く。